柊の三姉妹物語
柊 桐 編
落花之章
柊桐の視点より～

序章　『三姉妹』

「亜衣ちゃん、そろそろ寝なさい、こんな時間まで起きてたら、明日また起きられないわよ、それとも櫂くんに、また起こしに来てもらうつもりなの？　昔と違って櫂くんの家までは、結構距離があるんだし、それにあなたの方が年上なんだから、いい加減しっかりしないと駄目よ！」

あと数十分で日付が変わりる言う時間、居間のソファに寝転がりながら、深夜アニメを見ている妹の亜衣に、早く寝るようにと小言を言う私だったりする。

「大丈夫だよ椛お姉ちゃん、櫂の奴は、昔から私の子分なんだから、少しくらいこき使っても平気だよ！　いざとなったら、ぶん殴ってでも言う事聞かすこと出来るし、櫂の奴もけっこう喜んでいるみたいだし、私が遅刻しないように、責任を持って明日起こしにくるようにって、前もってきつく言っておいたから、大丈夫！　ちゃんと起きれるよ」

何か、色々と見当違いの返事をする亜衣だった。

「あのね、それじゃ櫂くんが可哀想でしょう。屁理屈ばっかり言ってないで、二階へ上がって早く寝なさい！　早く寝ないと、亜衣の『だ・い・こ・う・ぶ・つ』の【ピーマンと椎茸のニラレバ炒め】を明日の晩御飯のオカズにするわよ！」

「そりゃ卑怯だぞ、椛お姉ちゃん！　晩御飯のオカズを人質にするなんて、人間のする事じゃない！　椛姉ちゃんは、鬼だ！　悪魔だ！　年増だ！　恋人いない暦＝年齢だ！　ついでにペチャパイで性格が悪いぞ！　」

「はっ、はは……あはぁはぁぁ……」

私は座っていた椅子からゆらりと立ち上がり、ソファに寝転がっている亜衣の方へと、ゆっくりと足取りを向ける……途中で、床にあった漫画の本を手に持って……殺気を漂わせながらだ……

「あれ？　椛お姉ちゃ……椛お姉さま、そんな分厚い本なんかを手に持って、何故ゆえに私の方へと、近寄ってくるのでございましょうか？」

私はニッコリと笑って、亜衣の疑問に答えてあげる。

「う～ん……とね、私の事を……『年増！』だの『恋人いない暦＝年齢！』だの『ペチャパイ！』だの『性格が悪い』だの『鬼婆ぁ』だの『行き遅れ』だの『男日照り』だの『酒乱』だの……なんて事を言ってくれる。最愛の妹ちゃんの頭に、手に持った本を直撃……特に角の辺りとかを……させたら、どんな感じになるかを、急に確かめたくなってきちゃって……亜衣ちゃんも是非に知りたいでしょ？　だから、こっちにいらっしゃい、教えてあげるから」

「いや、知りたくないですし、それに私そこまで言ってないですから」

不穏な空気を察した亜衣が、ソファから飛び上がるように起き上がる。

「それじゃ、椛お姉ちゃん、わたし明日早いから、おやすみなさぁーい！」

と、そのままの勢いで二階の自分の部屋へと駆け上がっていった。

「もう……亜衣ったら……」

苦笑を浮かべ、手に持った本をぶん回してみる……なかなかに重くて、手頃な凶器だなと言う感想が思い浮かんだりする。

「姉さん……何かあったの？」

不意に呼びかけられ、視線を向けた先には、二階へと消えた亜衣の代わり……とでも言うような感じで、もう一人の妹である由美子が、階段の途中に顔を出して、本をぶん回している私の姿を、不安そうな表情を浮かべながら見ている。

「亜衣ちゃんがね……ちょっと生意気な事を言ったんで、お仕置きをと……もちろん冗談だけどね」

「それでお仕置き……ですか……」

由美子の視線が、私が持っている本の方へと向けられている。

「ははは……冗談よ」

誤魔化すように笑って、手に持った本を、先程まで亜衣が寝転がっていたソファの上へと放りだす。ドスン！　と言う。なかなか重々しい音がするが、私は強引に話題を変えてみる。

「ところで由美子は、まだ寝ないの？」

「姉さん、私はこれでも受験生なのよ、こんな早い時間に寝てなんかいられないわよ」

確かに来年の事を考えれば、ゆっくりと寝ている閑などないかも知れない、だけど体を壊してしまった元も子もない。
「確かにそうだけど、あまり無理しちゃ駄目よ、由美子の実力だったら、充分に合格圏内なんだから」
「うん……でも、何かしてないと不安で……もう少しだけ勉強を頑張ってから、寝る事にするから……大丈夫、無理はしないわ」
そう言いながら、二階の自室に戻ろうとした由美子であったが、その足が途中で止まり、私の方へと再び顔を向けてくる。
「姉さん、洗い物とか、後片付けがあったら、手伝おうか？　気分転換にもなるし、姉さんも明日は会社で早い筈だし……」
「大丈夫よ、受験生に家事の手伝いはさせられないわ。いざとなったら、亜衣に手伝わすから……」
「そう……でも、あんまり無理しないでね……姉さん……」
「由美子の方こそ、無理は駄目よ」
そして由美子も二階へと消えて行く、後に残ったのわたし一人……
「さて、洗物を済ませて、私も寝ちゃおう……」
腕まくりをしながら、台所へと向かう私だった。

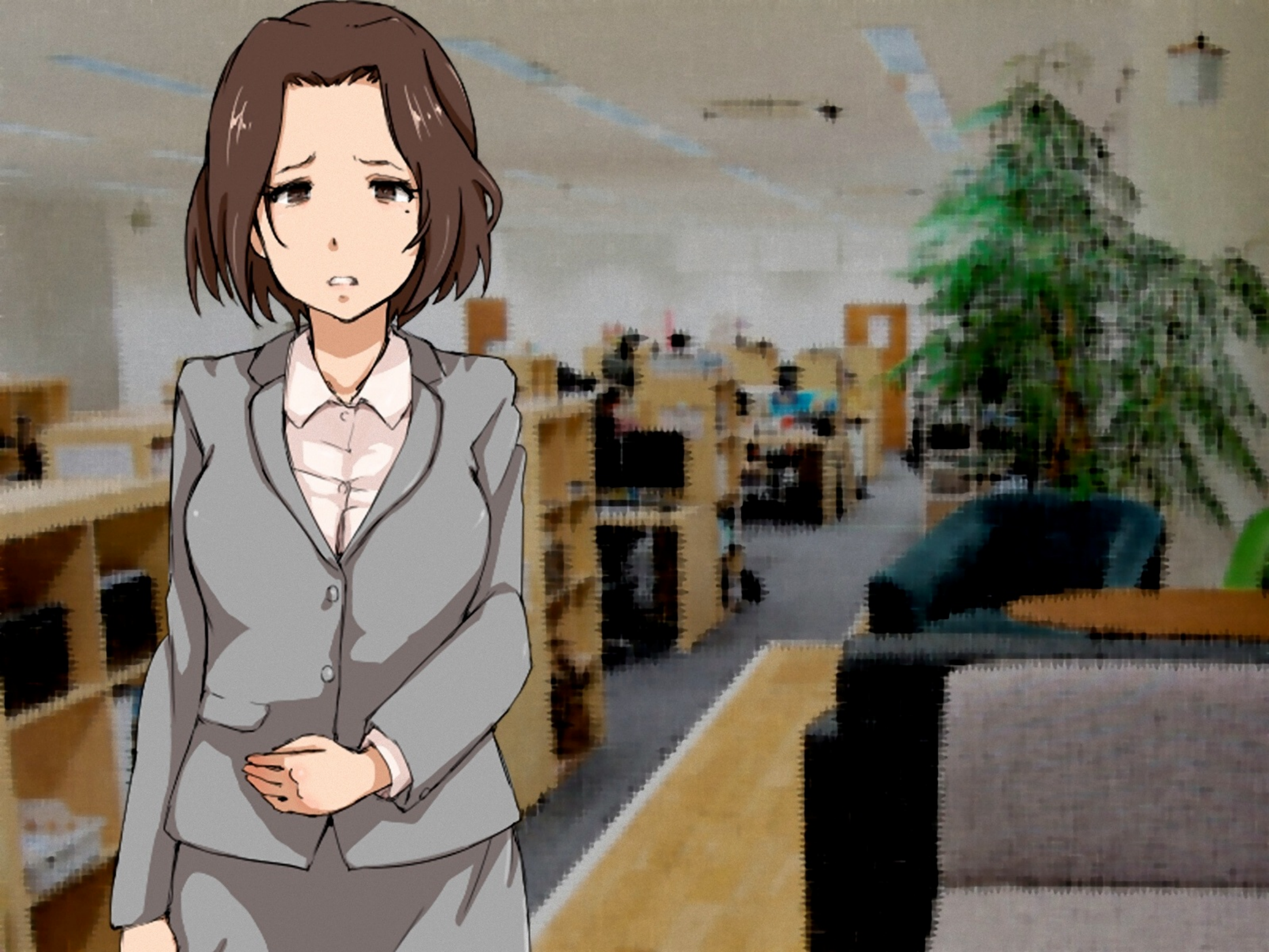
★

「ふぅ～……はやくお母さんとお父さん……帰ってこないかなぁ～……」
カチャカチャと、洗物をしながら考え……ふと思った事が口に出てしまう。
娘である私達三姉妹が見ても、思わずうんざりする様な、万年熱々イチャイチャデレデレバカップル夫婦である両親……何を突然に思ったのか、今更ながらという感じで、結婚当初に行きそびれた新婚旅行へと、結婚２５年目の新婚旅行に行く！　と、突然に言い出したかと思うと、私達三姉妹を家に残して、二人だけで唐突に海外旅行へと出かけたのが、二週間前の事だったりする。
「まあ、あの二人なら納得かな？」
長女であると言う事は、妹達よりも長い間、両親を見続けてきたと言う事で

あり、ある意味一番両親の事を知っていたりする。
お母さんとお父さんは、かなり年齢の離れた夫婦で、干支で言うなら一回り違った上での同じ干支だったりする。
（ちなみにお父さんの方が年上で、お母さんが十代の頃に結婚したとか……）
いつも新婚ほやほやを思い起させるような夫婦仲は、娘の自分が見ても赤面物だったが、逆にこんな夫婦になれたい良いな……なんて事も思ってしまう。
「でもねえ……」
そうは思っていても、残念な事に、自分には相手が居ない……この世に生を受けて、二十年ンッ年の年月を元気に生きてきたりするが、自分では不思議なのだが、何故か男性関係に置いて、とんと縁がなかったりする。
幼稚園時代……小学校時代……中学校時代……高校時代……大学時代……そして、会社勤めをしている只今現在も、物の見事に特定の相手と言うか……ボーイフレンドと言うか……恋人と言うか、お相手さんが居なかったりする。
「何でなのかな？」
と、考えても原因は不明で、思い当たる事がない！
これでは、下手をすれば、自分に良い人が出来る前に、色々と妹達に先を越されかね無いと言う不安と言うか、焦りと言うか……そんな事すら考えてしまう。
「亜衣ちゃんは、お隣の櫂くんがいるし……」
実際に、亜衣は自分の子分だと言っているが、お隣の櫂くんは、亜衣にとって勿体無いくらいに良い男の子だし、案外とこの先、恋人同士になって行くのではと、姉として生暖かく見守ってあげようと考えていたりする。
「由美子は……器量が良い娘だから、心配ないでしょうし……」
由美子はと考えると、姉である自分から見ても器量の良い娘であり、容姿はもちろん、プロポーション、性格共に文句のつけようがない良い娘で、いまは受験に専念しており、恋愛だとかは言ってられない様子だが、受験が無事に終わって、無事に進学して一息つけば、お似合いの相手に一人や二人はすぐに出来るだろうと思う。
「はぁふぅ……」

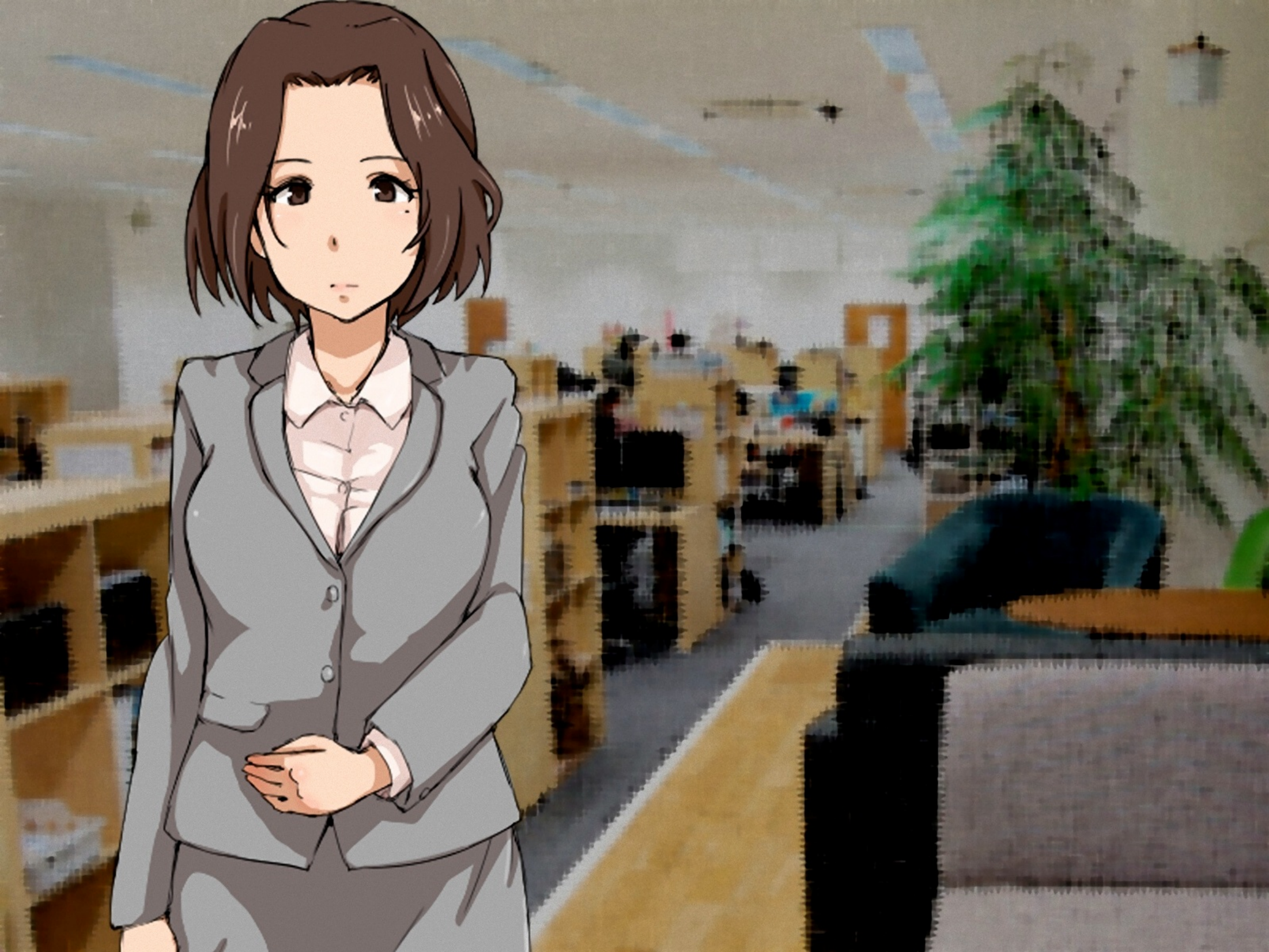
そして改めて自分の事を考えると、少々ため息が出てくる……
「どこかに、本当に良い人はいないかしら？」
私の良い人……そんなに理想は高くない方だと自分では思っているが、注文つけるとするなら……
「年上の人がいいかな？」
両親が、年齢の離れたカップルでありながら、嫌になるくらいに仲が良いのを見てたせいか、小さな頃から、何となく年上の男性が、良いなどと思ったりしてしまう。
「そして包容力というか、頼りになる男性かな？」
自分が、いまひとつ頼りない性格と自覚しているので、包容力があって頼りになる男性に、魅力を感じてしまう。
「そして……少し……強引な人も良いな～……」
なにせ男性にトンと縁が無く、自分の方からアプローチを掛ける事など無かったので、自分の方から積極的にと言うのは、ちょいと恥かしい……多少強引でも、相手の方から迫ってきてくれた方が、面倒が無くて嬉しいのではと思ってしまう。
「でも……そんな都合の良い相手なんて、居る筈無いわよね」
洗物をしながら、思わず苦笑いを浮かべてしまう私だったりする。
「んっ？」
苦笑いを浮かべている私の耳に、電話の呼び出し音が聞えてくる。
居間に置いてある固定電話が、早く電話に出ろとでも言いたげな、呼び出し音を鳴り響かせている。
洗物の手を止め、慌てて電話に出る。
電話に向う途中、居間に置いてある時計を見れば、すでに十二時を過ぎて、新しい日へと日付が変わっているのが見えた。
深夜と言える時間帯だ。
この非常識な時間に何事だろうと思いながら私は電話に出る……
「はい、柊ですが……どちら様でしょうか……」
電話に出た相手が何か言う……

「うそ……」
電話の向こう……何かを言っているが、その言葉の意味を理解する事が出来ない……いいえ……正確に言うなら、理解などしたくない……それでも電話の相手は、同じ事を繰り返し言う……
両親が事故にあったと言う事と、その死を告げる知らせ……
「うそ……うそよ……」
私は同じ言葉を再び繰り返すが、相手も同じ事を繰り返し言う……そして伝えられた事が、悪戯や偽りでは無く、事実である事を理解した瞬間、私の足元が崩れ去って行く様な感触を味わい、その場にへたり込み、そのまま意識を失ってしまいそうになるけど……
「だめ……だめよ！」
しかし気を失うわけにはいかなかった。
両親が旅行へと出かける前に言った言葉……
『椛は長女なんだから、私達が居ない間の、二人の世話は御願いよ……』
それに対して、私は胸を張って言った。
『大丈夫！　こう見えても私はしっかり者よ、お母さんとお父さんが居ない間の事は、キチンと二人の世話をしてあげるから、心配しないで旅行を楽しんできてね』
最後に見た両親の顔……妹二人の事をお願いと言いながら、笑顔で出かけていった両親の後姿……
「大丈夫……お母さん……お父さん……二人は、私がしっかりと面倒を見て、保護者になってあげるから、大丈夫……」
そう……この時、この瞬間から私は、二人の妹達の保護者となり、妹達を両親の代わりに守って行かなければならなくなったのだ。とてもではないが、悠長に気を失うなどと言う事など出来る筈も無く、この家の大黒柱になる事を決意をしたからであった。
「でも……」
この先の事など、どうすれば良いのかなど、想像する事も出来ない……両親が亡くなった現実を前に、私は途方にくれるしかなかった……



★

その後は妙に現実味の無い、まるで夢の中の様な事の連続だった。
ようやくに大学を卒業したばかりで、社会人一年の私にとって、その後の事故への対応は無論の事、亡くなった両親の葬儀を出したり、その後に生じる様々な手続き等と言う事は、考えた事も無ければ、想像する事すらなく、文字通りまるで未知の事態であり、一人だけでは手に負えない出来事の連続であった。
しかも両親には親戚縁者が少なく、頼れる親戚も居らず、それらの一切合切を取り仕切る事が、これからの家を……妹達を守っていく上で、私にとっての最初の試練と言えた。
（ただ不幸中の幸いは、それらの忙しさによって、両親の死と言う衝撃を、ほんの少しの間だけでも忘れる事が出来たと言う事であろうか？）
それでも隣近所や町内会の人々の手助け、相談に乗ってくれた会社の上司の世話などにより、葬儀やその他の様々な事を無事に済ませ、各種の手続きも何とか終わらせて日常生活（無論の事、もはや両親は居ず、残された私達三姉妹だけの日常生活ではあったが）に戻ったのは、両親が亡くなってから半年ほどたった頃であった。
その間に次女の由美子は、両親の死と言うアクシデントにめげる事無く、希望した学園の受験に合格し、無事に進学する事ができ、今では元気に通っている。三女の亜衣は末っ子と言う事で、両親の死に一番衝撃を受けたものの、姉である私達に達に心配をかけまいと健気に頑張っており、無事に元の明るさを（少なくとも表面上は）取り戻している。
（もっとも沈み込んでいた亜衣を、勇気づけると言うか元気にしてくれたのは、幼馴染の櫂くんが、力づけてくれた事もあるようだけど……）
そして当の私は、会社務めを続ける事にした。
両親の残してくれた家や財産、死んだ両親がかけおり受取人として指定されて、私達が受け取った多額の生命保険金、そして事故によって支払われた慰謝料や示談金などで、すぐに生活に困ると言う事は無かったが、妹達の進学等で、これから先も何かとお金が懸かるであろう事を考えれば、今の勤めを続けて行

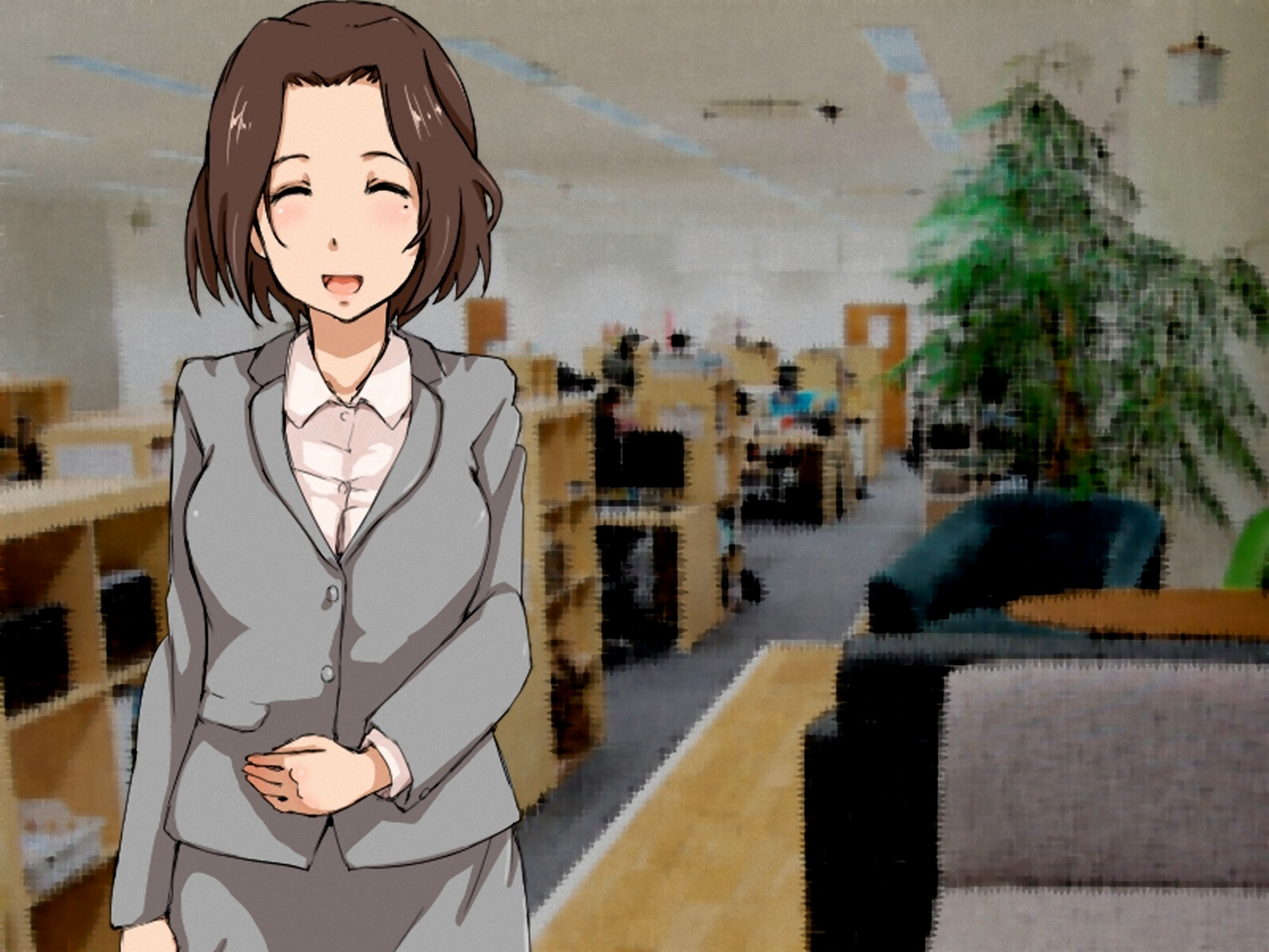


く事が最善の選択であり、また仕事自体も面白くなり始めていた。
こうして私達、柊家の三姉妹は、両親の突然の死と言う不幸に負ける事無く、三人で力を合わせながら仲良く、慎ましく暮らしていた。

……あの日、あの人が……あの男が……彼が……私を……その時までは……

章乃壱　「一夜の過ち……椛」

「んっ、疲れた～……」
終業を知らせるチャイムが鳴るのを聞きながら、私は大きく背伸びをする。
今日は残業の予定も特に無く、明日明後日と会社はお休み、あとは家に帰るだけだ。
「今日の食事当番は、由美子だったわね……何をつくってくれているかしら？」
そんな事を考えながら机の上を片付けて、帰り支度をしている私の傍へと、課長が近づいてきて、声をかけてくる。
「はい、なんでしょうか？」
課長は、私の直属の上司にあたり、両親が亡くなった時には、葬儀の手配や役所に出す各種の手続きの用意などで、なにかと手伝って頂いた方であり、その後も何かと世話になる機会が多く、感謝と共に多少の好意を持っている男性でもあった。
よくよく考えれば、私が考えていた理想の男性像……年上で、包容力があって、頼りになる男性……と言う条件に、結構当てはまる気がする。
もっとも課長は、既に結婚をしており、他の同僚と共に自宅にも招待された時に、綺麗な奥様と可愛い二人の子供の姿を見ており、異性としては意識はしていなかったけど……
「お食事を御一緒にですか……」
その上司である課長に、気晴らしがてらと、何か私の家の事で、困った問題が起こっていないのかと、近況を聞きたいと言う事で、今日は少し付き合ってくれないかと、食事とお酒に誘われる……私は、その誘いを受け入れた。公私にわたり、色々と世話をして頂いているという感謝の気持ちと、相談をさせて欲しい事も少しあったし、何よりも妻子ある男性であるという安心感が、課長に対しての警戒心を緩めたのだった。
「はい、私でよろしければ……でも私、あまりお酒とかは飲めなくて、本当に



少しだけになってしまうと思いますけど……よろしいですか？」
課長は笑顔を浮かべ、大丈夫……ほんの少しだけだからと言う。
「それじゃ、御願いします……あっ、お酒とお食事の代金は、割り勘でいいでしょうか？」
課長は、笑顔を浮かべたまま、誘ったのは自分だから、今日は奢らせてもらうよと言いながら、私の肩を優しく抱く……
「あっ……」
肩を抱かれた時……ほんの一瞬だけ、私は課長を異性として……男性として意識してしい、私の頬は少しだけ赤くなってしまい、それを課長から隠すのに苦労してしまった。

家へと連絡を入れると、妹の亜衣が電話に出る。
今日は少し遅くなるから、由美子と晩御飯は先に食べていなさいと言う私の言葉に、ちょっと残念と言うか、寂しそうな返事をしたが、できるだけ早く帰るからねと言いうと、早く帰って来てねと返事をする……両親が亡くなってから、少しだけ寂しがり屋になったような気がする亜衣……解ったわと言いながら、私は電話を切った。

★

そして私は、課長が予約を入れていたレストランで軽い食事を取った後、課長が行きつけだというバーに立ち寄る。
「今日は誘っていただき、ありがとうございます……でも私、あんまりお酒を知らないと言うか、正直に言うと弱いんです」
実際問題、本当に私はお酒に弱い……と言うか、自分の酒量の限界がよく解らなかったりする。
「実を言うと、少し恥かしいんですけど……学生時代の時、親しい友人達とちょっとカッコイイ……と言うか、洒落たお店に入って、出されたカクテルを2～3杯飲んだ後とか、家でお父さんからビールを勧められてコップで一杯飲ん

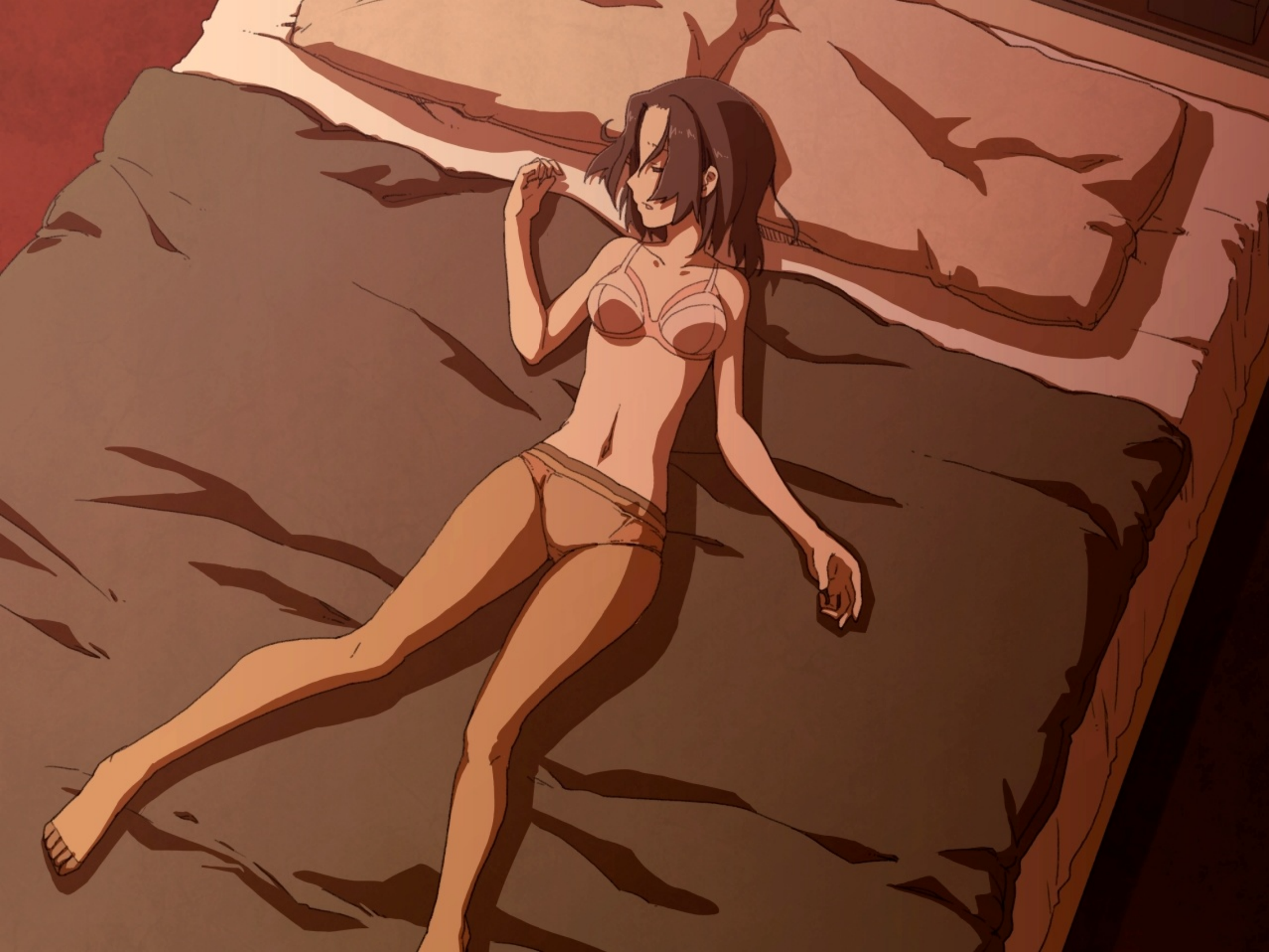
だ後とか……」
　思い出すのも恥ずかしくなってくる……という類の思い出だったりするのだが……
「何か……記憶が無くなってしまって、自分が何をしたのとかの記憶が、全然無くなってしまって、後で友人やお父さんに何をしたかを聞いても、ちょっと引き攣ったような顔をしながら、苦笑いを浮かべるだけで、誰もお酒に誘ってくれなくなって……」
　今も思い出す友人やら、お父さんの引き攣った顔……私は、本当に何をしたのだろうかと、意も持って思い出す事が出来ないでいる……
「ですから失礼をする事があるかもしれませんが、その時は笑って許していただけると安心できます」
　取り敢えずは、予防線を張っておいたほうが良いだろう……しかし、気恥ずかしさのせいか、顔が明らんできてしまうのを止める事ができなかったりする。
　課長は、笑いながら……そんな事になった家まで送ってあげるから、安心して……と言ってくれたので、ひとまずは安心しておく事にした。

「美味しい……」
　勧めたカクテルを一口飲む……それは、今までに飲んだ事の無い、美味しいと言うか、口当たりの良いカクテルだった。
「お酒って、こんなに美味しかったんですね」
　私は、課長に勧められるままに、出されたカクテルを次々に飲んで行く……
「なんか、いくらでも飲めそうです。お酒って、こんなに美味しいかったなんて、知りませんでした」
　本当に美味しかった……私は、カパカパという感じで、グラスを次々に空けて行く……課長に勧められるままに……
「あれ……何か……地震？　地面さんがぁ、ゆらゆらと揺れているような……だいひょうぶれひょう……か？」
　急に地面が揺れ始める……地震かな？　と思う……どうしちゃったんだろ？
　意識もうろうと言うか、酔眼の眼差しで、課長を見れば……なんと！　課長

が三人に増えていたりする。そして、その課長さんが、なんか言ってるようだけど……何を言ってるのか、声は聞えるけど意味が言葉として解らない……それでも三人の課長さんに勧めらた新たなカクテルを、私は受け取ると……

「はぁりがりょう、ござりますりゅ～……くふふふ、うふぅぅ……」

呂律の回らない口調で御礼を言って……勢いよく、キュッ！　と飲み干す……飲み干すのと同時に、私の意識は完全に跳んで行ってしまい、最後に見たものは、突っ伏したバーのカウンターだった……そして次に我に帰った時には、全裸になった……全裸にされた私は、課長に抱かれていた……



どうして……
続きは製品版にて…